

Eureka IX

六年制通信 No.25 令和3年11月19日(金)号

言い換え

受験生の中には推薦入試や AO 入試で自己推薦書が必要な人がいますが、自分で自分を推薦するのは難しいですね。自分が合格に値するというをアピールするのが日本人は下手だと言われています。自分の長所を口にするのさえ苦手ですよ。私たち日本人は基本的に奥ゆかしいので、私は〇〇ができるという表現をしませんし、自慢に聞こえる言い方は嫌いますからね。そもそも自己評価の高い人は能力が低いとされています。能力が高い人なら自他の比較がよくできるわけで、そうすると自分の持っている能力を相対的に見ることができます。ところが能力が低いと自他の冷静な比較分析ができないわけですから、勝手な判断をしてしまうのですね。

別に自慢しなくてもいいけれど日本人ももっと自己主張をするべきだ、それがグローバル・スタンダードだと、現代はそういうことになっているようですが、グローバルというのはアメリカ(精々プラス欧米)を指して言っているに過ぎないですよ。グローバルは「世界の」という意味ですが、世界共通の基準など作れるはずがないですよ。電気のない地域に暮らす人々も世界にはたくさんいるのですから。

何でも耳に心地よさげな言葉に変えて、特にカタカナ語などそうですが、わかったようなわからないような言い方が最近流行りですね。どうしてでしょうか。グローバル・スタンダードなど、その最たるものではないですかね。

ああ、推薦書の話でした…。こちらの方は、印象操作というほどではないのですが、否定的な表現を極力避けます。性格を書く時などそうですね。私たちも推薦書を書きますが、マイナスの印象をプラスかせめてゼロくらいになるように言葉を言い換えます。「おしゃべりな生徒」なんて書けないので、「社交的な生徒」くらいにしましょうか。以下、面白いので、否定的な表現を肯定的に言い換えてみましょう。

おしゃべり：社交的、騒がしい：活発に意見を述べる、愚痴が多い：自分の考えを持っている、頑固：意志が固い、飽きっぽい：好奇心旺盛、何をするにも時間がかかる：自分のペースを崩さない、頼りない：非常におとなしい、人の意見にすぐ流される：臨機応変に対応できる、屁理屈を言う：論理的に話す、行動力がない：フォロワーシップに優れている、しつこい：粘り強い、落ち着きがない：アクティブである、八方美人：誰とでもすぐ友達になれる、小さいことを気にする：感受性が豊か、自己中心的：簡単に妥協しない、なまいき：自分に自信を持っている、時代遅れ：流行りに流されない、ずるい：利発な、などなど。自分で書いていて笑えてきたわ。何だか詐欺師になった気分だ。ま、こんなのは*white lie の類と言っていいでしょうね。書く方も読む方も十分に

心得ているわけですから。

しかしこれが行動の指示、特に子どもに対する場合は（最近の子どもみたいな大人にも言えますが）否定表現よりも肯定表現をとることが大切です。明らかにミスが減るらしい。例えば廊下を走らないようにしたいとき「廊下は走らない」と否定で指示するのではなく「廊下は歩きましょう」と言うわけです。同じことのようにですが効果が違います。面白いもので「走らない」と言われたり読んだりすると、「走る」という言葉が印象に残るらしいのです。意識するとよけいにそれが忘れられなくなることあるでしょ。あれですね。京都から高速に乗って三重県に帰ろうとすると、まず名古屋方面か大阪方面の二択があるのですが、「大阪方面に行ったらダメですよ」と否定的な表現で教えると、「大阪」が印象に残ってしまって失敗しやすくなるのです。ですから、「まず名古屋方面に進んでください」と肯定的に言うべきなのですね。ですから他に例えば、「11月12日以降は受けつけません」ではなく「11月11日までは受けつけております」とか、「手を離さないでください」ではなく「手を握っていてください」とか、「10時まで戻りません」の代わりに「10時には戻ります」とかね。「○○がないと～できません」という表現も多く見かけますが、これを「○○があれば～できます」とすると間違いが起きにくい気がします。君たちも日常で探してごらん、こういう表現を。これも少し前に書いた「行動の仕掛」の一つですよ。 *white lie : ホワイトライ、罪のないウソ

今週のおすすめ

・遠藤周作 『人生の踏絵』（新潮文庫）

遠藤さんの講演を文字に起こしたものです。遠藤さんの作品は、若い頃からずっと読んできたので、ここで取り上げる機会も多いかと思います。

1979年1月から半年にわたり合計6回、紀伊國屋ホールで行われた連続講演がこの本には入っています。全体のタイトルは「文学と宗教の谷間から」です。遠藤さんは大学でフランス文学を学んだこともあって、フランソワ・モーリヤック、グレアム・グリーン、ジュリアン・グリーン、アンドレ・ジッドなどを原語で読んでいます。ぐうたらシリーズだけしか読んでいない人には知られていませんが、阿川弘之の言うように、遠藤さんは刻苦勉励の人です。日本人あるいは日本の文化とキリスト教の関係、日本という風土にキリスト教は本当に根づくのかという非常に重い課題、それらが遠藤さんの出発点ですから、彼の目に西洋の（フランスの）キリスト教作家たちの作品群がどう映っているかという今回の連続講演は非常に面白かった。生徒諸君には少し難しいかもしれませんが、作家はこんなことを考えているのか、本はここまで読み込まないと本当に読んだとは言えないのか、など今後の読書生活の参考にできますよ、きっと。『沈黙』を読んでいて、なおかつ多少キリスト教（とりわけカトリック）の知識があると、なぜ『沈黙』がカトリック教会で「禁書」扱い（つまり読んではいけない本）されたのかがよくわかります。遠藤さんの中のイエス・キリスト像を肯定していいのか、私もずっと結論の出ないまま、そして魅力を感じたまま今日に至っています。

BGMは QUEEN の *Don't Stop Me Now* でした…。